



パリオリンピックの開会式が行われるセーヌ川
photo by Saori

Français 突撃インタビュー

今月のお客さま ジャンマリー・ブルドンさん

フランスの書店は接客時間が長い!? 日仏書店事情を聞く

福岡を拠点に「Nautilus - Culture et langue française à Fukuoka」を主宰してフランス文化の普及に努めるジャンマリー・ブルドンさん。ブルドンさんは以前フランス語作品の専門店「Nautilus」を開いていました（残念ながら書店は昨年閉店）。本が大好きなブルドンさんに日仏の書店の違いを聞きました。（取材 編集部）



フランスの書店員から日本の書店経営

◆フランス語専門店を開いた理由は?

日本ではこんなにフランスに興味がある人が多いのに、フランス語の本の専門店が少ないのは驚きでした。だから「Nautilus」をオープンしたんです。店内は、原作がフランス語の日本語の本を並べていて、カフェスペースもあって話もできる場所。いろいろな方から「Nautilus」を「面白い」と言われましたが、本の購入まではつながらない。僕は販売の仕事のくせに、押し付けるのは好きじゃなくて（笑）。仏語原作は難しいと思う人が多かったのかな。あとお店の経営者としても初めてだったし、コロナ禍もあって難しかったです。今はフランス語の先生をしています、そのうち僕のできる範囲でまた本に関わることをしたいなと思っているよ。

◆なぜ日本に?

僕はフランスのナント出身で、高校では書店の販売や経営について学んで、卒業後はフランスの書店員として4年間働いていました。でも1年間だけ海外に住んでみたくて、当時フランス人の友だちがいた大阪で1ヶ月過ごした後、2006年に来日しました。絶対日本とこだわっていたわけじゃない。日常から離れて別の場所に住んでみたかった。そのあと、日本人と結婚して福岡に住むことになったんです。

◆それ以外で日本に興味があったのは?

『AKIRA』（大友克洋）と松本大洋の漫画は好きでした。フランスでも人気があります。松本大洋は、絵の描き方を作品によって変えているのが芸術的。

商品としてパターン化されて作られている少年漫画とは違うところがフランス人は好きなのかな。

「二人の読者」が話せるフランスの書店

◆日仏で書店の違いは?

フランスの書店は接客時間が日本の大型書店よりはるかに多いです。日本では代わりに書店内で「ブック・コンシェルジュ」という別の職業があったりして、わけがわからないね! コンシェルジュがやっていることは、フランスの書店員の仕事だから。

たとえば、日常の買い物は、自分の好きなパン屋さんや八百屋さんに通うよね。フランスは本屋さんもおそらく好きだから行く。お客と店員というよりは、二人の読者が話すという関係なんだ。お互いに本が好きだから、話が止まらない。でも日本は在庫管理や返品作業がすごく多いし、年間の本の刊行点数もフランスの2倍だし、だいぶ違うね。

◆接客についてはいかがでしたか?

僕はフランスと同じように店で本の話をしていただけで、みんな買わないで帰っちゃう。

「面白そうでしょ!」「面白いね!」「じゃ、また!」みたいな感じ（笑）。最後のはフランスにはないよ。フランスのお客さんは買ってくれることが多い。失敗もあるけど、あんまり気にしない。日本では自分が知らない世界の本を読むのが怖いのかな。僕も半分しか内容が理解できない本だってあるし、全部分からなくてもいい。日本人は効率を考えすぎだと思う。読書はそんなもんじゃない。

◆お客さんにも日仏の違いが?

日本人がどうやって本を買うのかは、未だに分からないね。僕が驚いたのは、作家名よりも翻訳者の名前で購入者が多かったこと。いい先生だから買う。おすすめがあると買う、みたい。本屋大賞や凝ったポップを書店員が考えてるけど、フランスは書店員がちゃんと読者と接する機会が多いから、ポップは付箋にさっと書いて貼るだけだね。

◆おすすめのフランス語原作の本は?

まず、サン・テグジュペリの『人間の土地』。彼の作品で有名な『星の王子様』の元になったと言われるお話。作者がフランスからベトナムへ飛行中に砂漠に不時着した時の実話で、『星の王子様』に出てくるキツネ（『フェネック』という砂漠のキツネ）の足跡を追う話もあります。もう一つはジャン・ジヨノの『木を植えた男』。これはフィクションですが、作り話なのを隠していたら、読者が南仏まで主人公を探しにいったというくらい人気がある本です。

Instagram @libr_nautilus



毎週土曜日あさ9時30分から、テレビ朝日で放送。 tv asahi



食材ひとつに、多彩なドラマ。
毎週土曜日に放送中の「食彩の王国」は、身近な「食材」たちが主役。さまざまな食材が織りなす食文化の歴史や産地の風土…。そこに流れる時間をひも解くことで、人と食材のかかわりを探っていきます。

食彩の王国

語り 冨田九穂子

番組ホームページ www.tv-asahi.co.jp/syokusai

マダム愛の わたくし ミュラン

第126回

今年2月にOPENしたガストロノミー

星 つきミュラン店での修行を経て、パリ16区の高級住宅街に今年堂々と自身のお店をOPENした山本シェフ、レストランの名は「Ken Yamamoto」。

こじんまりとした店内はセンスが溢れる空間で入った瞬間から期待が高まります。

この日はランチでしたが、本来はディナーのみでの提供のこちらのスペシャリテ、フォアグラの西京焼きを前菜で頂くことができました。表面がパリッと、中はとろ〜と。焼き加減が絶妙すぎる！そしてあっさりしながらも味が染み渡っている大根との相性が抜群すぎて止まらない〜。食べ進むにつれてお皿から無くなるのが寂しくなる程でした。友人が頼んだ「みかん鯛」のカルパッチョは、本当にみかんを食べさせて育てた鯛のごとらしく、あの独特のみかんの皮の風味が。お初なお味です。メインの仔牛肉はつけあわせが天ぷらという、フランスではありえない1皿。マデラ酒をこれでもかと言うくらい煮詰めて作るソースが濃厚で、あっさりとしたお肉に力強さを与えてくれていました。友人のお魚にはオレンジ

と醤油のソース。甘酸っぱさが最後に香る濃口のソースがお魚にぴったり。アンディーブ（チコリ）の苦味も全体をまとめてくれて良いお仕事していました。デザートはとろりとしたフォンダンショコラ。カカオのソルベと頂きます。甘過ぎず、チョコレート本来の風味を感じる事ができる大人の味のデザートでした。最後にお茶菓子を頂いて終了。全体的にハズレの無い正当なフレンチだなと思ったランチタイムとなりました。

- A. 美しすぎる内装。
- B. スペシャリテのフォアグラの西京焼き。もう最強という言葉が合う1皿。ただ、大根に合わせていてもかなりこってりしているので、この後に頼むメインは気をつけた方が無難かもしれません。
- C. メインの仔牛肉。マデラ酒で作られたソースが美味しくて、これだけでどんなお肉でもお魚でも美味しく変身させる事が出来そう。
- D. デザートが実はちょっと残念でした。もちろん美味しかったのですが、このレベルのレストランならばもう少し工夫したデザートがいただきたかったな、というのが本音でした。



A



B



D

今月のハート

料理	♥♥♥♥♥
ドリンク	♥♥♥♥♥
サービス	♥♥♥♥♥
雰囲気	♥♥♥♥♥
コスパ	♥♥♥♥♥

Ken Yamamoto
144 Rue de la Pompe 75116 Paris
01 45 62 64 97
<https://www.kenyamamoto.fr>

writer **マダム愛**
東京で知り合った仏人男性に連れ去られ、気が付けばパリジェンヌとやらの。パリのレストランと生活、2つのブログを書いています。
blog **マダム愛の徒然パリ日記**
<http://www.paris777.blog.fc2.com/>
blog **マダム愛のアパートの鍵貸します**
<https://www.madameai.com/>

マジイ!? 翻訳家レミの
ここがびっくり 世界文学
ガラガラ奪われた若き王の怒り

フランスでは選挙タイム。また？と思われるかもしれない。無理もない。三週間前は欧州議会選挙が終わったばかりだ。しかももうパカンスシーズンに入っていたから、休みを何より大事にすると思われがちのフランス人はてっきり何もかも捨てて自分の選挙区からなるべく遠い砂浜に出掛けているのではないかと誰もが予想していたのだろう。オリンピックもじきに始まるし、こういうビッグイベントの時こそ国が政治的に安定しないと非常にまずいはず。

しかしまるで玩具を取られて拗ねた子どものように今回大負けしたマクロン大統領が一方向的に議会下院を解散させたことで突如再び選挙が決まった。政治部記者のパカンスの予定がまる潰しになった上、ネットどころか国自体が炎上状態。大統領制は隠れ王政だと言われるほど大統領の座に座る者は圧倒的な権力を握っているが、その

分、ある種の「国家の父」らしく、国民の声を尊重しながら礼儀正しく振る舞わないとかつての王のようにその国民の反発的になりえる。

ポピュリズムが世界を席巻する中、優秀な頭脳を持ち主だと言われるにもかかわらずマクロン大統領がなぜかその危機を全く感じとらず、国民を蔑ろにしながらか国より「欧州の父」を志していたようにフランス基準ではなくヨーロッパを中心に話したりするのが本人が思っているより致命的なミス。一方、いわゆる移民問題を直視すらない極左はより難民を受け入れるべきだと掲げたりすることで、国民の怒りの火に油を注ぎ、政策を間違えたと思われる。どうりで大雑把なマニフェストしか提出してないのに極右と言われる政党がそんな簡単に最大勢力になった。

フランス人の三分之一が突然にナチスになったのではなく、この不景気で国民の苦情に耳を傾けようとすらない大統領と全く別な話をごり押ししようとする政党にただただうんざりしてるだけだ。少なくとも半世紀前から不満が積もってると思われるが、臭い物と同じく、溢れ出しそうなお湯に蓋をするのは決して賢明な解決法ではない。特にパカンスで家を出ようと思った時期に。

『あきらめない政治 ジャーナリズムからの政治入門』 鮫島浩 著 那須里山 絵



writer **Rémi BUQUET**
翻訳家・通訳者
Contact buquetremi@negoto.fr



とびこめ! ミュゼのとびら

今更聞けないフレンチアート

伝えたいのは水のゆらめき

水 面に映える光、そのゆらめき。この頃モネは、如何にみずみずしく水面に反射する太陽を表現するかにこだわっていました。「ラ・グルヌイエール」、ブルジョワたちには人気で、ナポレオン三世も愛したという、パリ郊外のセーヌ河畔にある水浴場。そこに浮かぶ水上レストランの風景を描いた作品。

1869年の夏。1874年にモネが、第一回目の印象派展で、「印象 日の出」を発表する少し前のこと。こだわったのは、筆触分割と言われる技法。通常色を作る時、パレット上で何色かの色を混ぜて作るのですが、この技法は色を混ぜず、一つ一つの色を隣り合わせに配置します。そうすることにより、鑑賞者は遠くから見るとまるで二つの異なる色が一つの色に見えます。網膜上で色が

ラ・グルヌイエール
モネ
メトロポリタン美術館蔵

交わる錯覚を生かした技法です。混ぜ合わせるよりも立体的にみずみずしく見えるのです。印象派の代表的な技法となった筆触分割。モネはこの頃から、これから自身で牽引していく印象派としての土台を築きつつありました。

そして実はこの時、モネの隣にいたのは親友のルノワール。彼らはキャンバスを並べ同じ風景を描きました。絵を見比べると、すでにそれぞれの個性を見てとれます。風景の中に人物を溶け込ませて描くモネ。一方人物に焦点を当て生き生きと描写するルノワール。しかし、共通して言うのは、二人ともその瞬間と光を閉じ込めているということ。

銀座並木通りに、このモネの作品にインスピレーションを受けた建築物があります。建築家青木淳さん設計のルイヴィトンビル。水のたゆたいたいにも似た壁面は青い空に溶けてしまいそう



です。これから夏本番、この三次元の水面のファサードで視覚的に涼を楽しむのも良いですね。

writer 妹尾優子

仏語教師の傍、仏文学朗読ラジオ「Lecture de l'après-midi」の構成とナレーションを担当。美術史 & 日本史ラブ。日仏の文学からアートまで深掘りする日々。

HP <https://note.com/tabichajikan/md750819c9bc7>

仏人添乗員リラの 日本リラ散歩

アートに触れる

東 京に移住してから美術館にあまり行ってないので、国際博物館の日に入場料が無料



東京国立博物館へ初入場

になっていたことを機にずっと行きたかった東京国立博物館に初めて行った。通っていた大学の日本史の授業を思い出しながら縄文時代の展示物が見られて面白かった。

フランスは、年齢を問わず通年無料で入場できる博物館などに加え、EU圏国籍者かつ26歳以下であれば国立の美術館、博物館、モニュメントの常設展を無料で楽しむことができる。また、数年前から15歳~18歳の若者向けに「カルチャーパス」という制度ができて、専用のアプリに登録することで身近にある様々なアートや文化に触れるために金銭的な支援を受けることができるものだ。与えられたお金は、アプリを通じて購入できる本、映画・コンサート・演劇・フェスのチケット、実際のワークショップ、音楽などに使えるそうだ。日本は逆に、人口を反映したシニア割引が豊富である一方、自分が知らないだけかもしれないけど若者向けの制度はちょっと少ないように感じる。学割は見かけるけど、学校や大学に通っている必要があるのではアウト。

東京で観光ガイドをやっていた頃、無料で楽しめる体験や施設を調べるのが好きで、数年前にその一つである東京都水道歴史館を訪れた。江戸時代に実際使用されていたものが展示されていたり、当時の様子を再現するミニチュアがあったりして予想よりも楽しめた。一つの観点から東京の歴史や仕組みについて理解を深め、ガイド中で使える豆知識にしていた。

やっぱり東京に住みながら「もっとルーヴル美術館に行けばよかった」と今思っているように、もし引越すことになったら今度は「東京のここに行けばよかった」とまた後悔すると思うので、もっと意識して今のうちに東京の美術館や文化施設を満喫したい!

writer リラ

東京で翻訳者としても活躍する30歳のフランス人女子。持続可能な社会の実現に向けての活動もする。趣味は編み物とペランダの植物の世話。

トモクンの アレコレ、パリコレ、ナンザコレ~

オリンピック憎けりや袈裟まで憎い?! パリ五輪のマスコットを語る

2 024年パリ・オリンピックを目前にするパリですが、大会に向けて冷めた視線を送るパリジャン・パリジェンヌが多い気がします。6月末にバカンスに出発した人も多く、街中にいるのは観光客ばかり。という僕も、7月10日にフランスを脱出して日本に戻る予定。ただでさえ高い物価がさらに高くなるようだし、地下鉄のコンコルド、チュイルリー、シャンゼリゼ・クレマンソーの各駅は閉鎖され、セーヌ川に架かる橋は常にごこかしらが通行止めとなり、地下鉄でしか渡ることができず不便を強いられます。そんな非人間的な扱いを受けるなんて耐えられません。この現状を不満に思うパリジャンが、セーヌ川に向けてある示威行為をする動きが広がっていますが、

内容があまりにも汚いのでここでは書きません。

さて本題。オリンピック憎けりや袈裟まで憎くなるのが人間というものとして、五輪マスコットの可愛くないこと。フランス革命期にサン・キュロットが被った帽子、フリギア帽にちなんでいて、名前はフリージュ。一見してエッフェル塔に見えるし、ネットユーザーの間では人間の身体のとある部分に似ていると話題になり、それを理由に不興を買ったよう。ぬいぐるみについても、1割にも満たない数しか国内生産されておらず、それについての批判が起きました。とにかく歓迎ムードゼロ。

フランス人にとっての誇りであることは理解できますが、血塗られた歴史でもあるフランス革命の象徴をオリンピックに持ち込んでしまったことも少々残念。エッフェル塔だったらまだ良かったのに。東京の時もなかなか冷め具合でしたが、フランスの場合は半分無きものになっている感じがするかもしれないオリンピック。早く過ぎてくれることを願っている人は多いはずで、試練の2ヶ月半になりそうです~。



writer トモクン

トモクンという名の45歳。在仏27年。ファッションジャーナリスト(業歴17年)は仮の姿で、本当はただの廃品回収業(業歴5年)。詳しくはブログ「友くんのパリ蚤の市散歩」にて。

blog 友くんのパリ蚤の市散歩
<http://tomos.exblog.jp>



第4回

トイレを探して三千里
——ニューヨークお前もか

ニューヨークの現地小学校に1ヶ月通って姉妹は夏休みに突入。安いサマーキャンプがあると聞いたので、調べると最少単位である2週間の申し込みで1000ドル。安いのか。しかもそれ2人分。清水の舞台から飛び降りる気持ちで支払いをしたら、カードが止まった。ニューヨーク怖。セールの季節を迎える前に万事休すウウ! NY駐在が長い方が、夏休みは日本に帰って日本の小学校通った方が安いと言って帰国する噂は本当に違いない。サマーキャンプには健康診断が必須とのことで、急いで近所の小児科を予約したのですが、約束の時間に行ったらドアが閉まってインターホンも反応なし。電話をしたら、「急病で休みです」なぜ患者に教えてくれない。しかも代わりに粹を取ってくれた小児科めっちゃ遠い。しかし文句を言える英語力はない。渋々バスを乗り継いで紹介された小児科へ。身長・体重、聴覚などに続き、視力検査。マークが全てアルファベットで緊張した姉妹。長女は最初に指したデカイPを「エフ」と読んで、先生を「そんなに目が悪い?!」と動揺させていましたが読み間違えただけです。次女は緊張のあまりアルファベットを読み上げるのをあきらめ、Iはスペリウム光線のポーズ、Tは「タイム!」のポーズで伝える作戦。カワイイ。対する先生は次女がPを読めたのをいいことにPのみ指す作戦に。「ピー。ピー。ピー。ピー」。遊ばれているのかもしれない。時々挟まるトリッキーOにもギリギリ耐えました。前屈させて背骨を見たり、パンツの中に手を入れたり、日本の健康診断とは若干違うムーブもありましたが、無事終了。「じゃ、ワクチン接種リストをください」「は?」そこから急いで家に取りに帰ったのでした。無駄な動き多すぎだぞ文句を言える英語力は一。

さて、私の方については恐れていた事態を迎えました。ストップ腹下しシーズンインザサン! 外暑い、室内に入ると極寒、腹冷える。腹下すのルーティンです。アメリカの人々はほぼ変質者くらい肌を露出

しているのに、室内の冷房がサッポロ雪まつりの氷像でも管理してるのかというくらい冷え込んでいるのです。あ、お腹冷えそうと思うだけでもう腹が痛くなってしまふ。パリでは基本ずっとお腹が痛い状態でしたが、ついにNYでもトイレ探しの旅が始まったのでした。

先日は長女と二人で食器屋さんにお買い物に行きましたが、まず乗ったメトロが無茶苦茶寒い。降りた目の前の公園のトイレに駆け込むも、便座がない。許せん!! が! 怒っている余裕はない! トイレトペーパーで無茶苦茶拭いて座りました。O型で良かった。お腹も落ち着いたので、目的の店へ。店内はもちろん寒い。さらに商品が一面並んでいる空間に行くとも腹が痛くなることを忘れていた。買いたいものもたくさんあったのに、おねがい梱包! 待てない肛門! yeah! 急いでお店を出て、近くのスタバに入るもトイレがない。もう私はオムツマンインニューヨークとして生きていく、と決心したころマクドナルドを発見。息も絶え絶え液晶で長女のシェイクを注文したはいいものの、神経が肛門に全集中の呼吸なので(鬼滅を知らない)レシートをいらないボタンを押してしまったのかレシートが出てこず、トイレのドアの暗証番号がわからない。終わった…。トイレのドアを青い顔でガチャガチャやっていたら、若い店員さんが無表情で鍵を開けてくれて滑り込みセーフ。神様かと思った。死んだお母さんの化身かもしれない。個室の中で神様に感謝の祈りを捧げ、ここを絶望と救済のマクドナルドと名付けることにしました一。

writer 吉野亜衣子

ラジオ局を辞め、夫の留学についてパリへ。帰国後、日仏文化交流のための NOISSETTE を設立。2022年で設立10周年。2024年春よりNY在住。

HP <https://note.com/noisettepress>

podcast <https://podcasters.spotify.com/pod/show/cafenoisette>

スイーツア・ラ・モード

私を通り過ぎたお菓子たち

夢のようなデザートを手軽にカフェで♡

ま た訪れたい。私がそう思うレストランは最後のデザート (dessert) が印象的だったかどうかによって左右されます。テイクアウトは出来ない! タイミングを合わせて席に運ばれてくる、レストランでしか食することが出来ないひと皿は繊細で夢のようなものであって欲しい…たとえメインが美味しくて「デザートが少し残念だったなあ」と感じると私はそのレストランを記憶のすみっこに追いやってしまうのです。デザートが印象的だと「ああ、あのデザートだけ食べられたらなあ」と叶えられない夢をみてしまいます。スイーツ好きとはなんとワガママなのか!

で・す・が…なんとそれを叶えてくれるカフェがあります! 有名レストランでデザートを担当していたパティシエさんが生み出す繊細なひと皿を珈琲と一緒にぜひ★ 脳内に幸せドーパミンがあふれ出しますよ〜!



photo by omusubi

苺とエルダーフラワー・黒文字、ジュニパーベリー、タイムを使ったアキラさん (@akira9_25) が森の木の実や葉っぱから発想を得た期間限定デザート。閃絶の美味しさ★12€

[PONTOCHOUX CAFÉ]
18 Rue du Pont aux Choux 75003 Paris / 月曜定休 / 曜日によって営業時間変更あり @pontochoux.cafe

writer おむすび

1年だけの語学留学のつもりが…水が合ったのか!? そのまま関西弁パリジェンヌに。ガイド歴10年以上。キラキラだけじゃないパリの親しみあるリアルをご案内中。

Instagram @OMUSUBI_Food_Paris



▶山積みパーフェクトじゃ ▲これが眼の検査表だ! ない皿たち。お前もパーフェクトなのか? と挑発的です。

ノアセットプレスへの

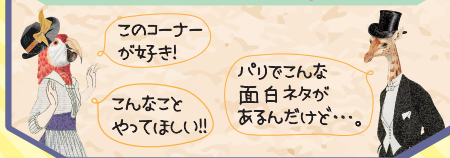
ご意見・感想

大募集!!

ただいま編集部では、「もっとオモシロ楽しい紙面作りを!」と考へて、読者の皆さまからのご意見・ご感想を大募集中。

感想をお送りいただいた方の中から抽選で5名に、『パリに住みたくなったら読む本』を差し上げます。どんな小さなことでもOKです。皆さんの熱い(!?)メッセージを編集部一同お待ちしております!

送付先 ✉ info@noisette-paris.net



イベント開催決定
Noisette Press PRESENTS
パリ在住アンティーク商
トモクンに聞く!
パリ蚤の市巡り
勝手にお宝鑑定

ワインとチーズのアペロで
楽しむパリ蚤の市情報!
2004.9.7(土), 8(日)
自由が丘 gallery yururi 詳しくはこちら▶

大好評発売中!
英語だって日本語みたいに楽しくしゃべりたい
リアルライフ英会話
for Women
TAS & コンサルティング
<http://www.jp-tas.com>

ノアセット
Noisette
プレス
Press
À bientôt!
発行元: ノアセット東京オフィス
<http://www.noisette-paris.net/>
編集発行人: 吉野 亜衣子 編集: 小橋 桜子
タイトル illustrations: Masumi Yamaguchi